

# 沙織

直腸に刻まれた、夫への裏切りと排泄の悦楽

【体験版】

硝子蜂 著



## † 読者の皆様へ

本作は「蜜々文庫」が贈る、  
純粋な空想に基づくフィクションです。

作中の過激な描写はあくまで物語を彩るファンタジーであり、  
現実に存在するあらゆる犯罪行為（暴行、脅迫等）を  
容認・推奨するものではありません。

現実の世界では、互いの合意と尊厳を何よりも大切に。

——本能の解放は、  
どうかこの物語の中だけでお楽しみください。

# 前書き

誰にでも、踏み越えてはならない一線がある。

小学校に通う息子や夫を愛し、日々家事に幸せを感じる沙織。その慎ましい微笑みを、疑う者など誰もいない。だが、その平穏は、俺の指が彼女の最も汚らわしい場所に触れた瞬間に砕け散る。

子供部屋から息子たちの無邪気な声が響くその傍らで、清楚な母親が直腸から汚され、夫への謝罪を快楽で塗り潰されていく。

本作は、一人の女が「母」から「雌」へと変貌する過程を克明に描いた、三万二千文字の背徳の記録である。

あなたもその共犯者として、沙織が最奥から壊れゆく一部始終を、最後まで見届けてほしい。

——蜜々文庫

# 登場人物

## † 葉山 沙織（はやま さおり）

ハルトの母親。家族を愛し、平穏な日々幸せを感じる清楚な女性。タイトスカートに包まれたしなやかな肢体は、本人の無自覚とは裏腹に、周囲の男たちの劣情を煽っている。一郎による「マッサージ」という名の蹂躪をきっかけに、その直腸から「母」であることを剥ぎ取られていく。

## † 松田 一郎（まつだ いちろう）

本作の語り手。小学生のタカシを育てる人当たりの良い父親。しかしその内側には、高潔な女性を「雌」へと塗り潰したいという歪んだ支配欲を秘めている。沙織の小さな綻びを見逃さず、彼女を泥濘の淵へと引きずり込んでいく。

# 目次

第一章：綻びのプロローグ	6
第二章：甘い蹂躪の指先	17
第三章：変態の烙印	47
第四章：不浄の排出	67
第五章：甘美なる陥落	94

# 第一章：綻びのプロローグ

運命を狂わす毒。出会いたくなかった男との邂逅。

せっかく休日だというのに、妻は仕事で朝から不在だ。家でゴロゴロと微睡む計画を立てていた俺に、妻は家を出る間際「今日はハルト君が遊びに来るから、よろしくね」と、無慈悲な伝言を残していった。

ハルト君というのは、小学一年生になる息子・タカシの友人だ。子供同士で遊ばせておけば済む話だが、母親も一緒に来るとなれば、世帯主として相手をしないわけにはいかない。

「はぁ……面倒くせえな」

リビングでテレビを眺めながら、思わず溜息が漏れる。タカシは友達が来るのを今か今かと待ち構えているが、俺にとっては休日の邪魔な来客でしかなかった。

ピンポーン。

不意にインターホンが鳴り、静かな家の中に不協和音が響く。タカシは「来た！」と弾けるように玄関へ駆けていき、俺も後を追い、重い腰を上げた。

ガチャリとドアを開けると、そこには大人しそうな少年と、その横に寄り添うように三十歳前後の女性が立っていた。

「こんにちは、葉山です。いつも息子のハルトがお世話になっております……」

控えめに会釈をした彼女を見た瞬間、俺の脳内に走っていた「面倒だ」という思考が、一瞬で霧散した。勝手にモッサリとした中年女を想像していたが、目の前にいたのは、こちらの予想を大きく裏切る整った顔立ちの美人だった。

ショートヘアがよく似合う清潔感のある横顔。紺のタイトなスカートが彼女のしなやかな腰のラインを強調し、白いブラウスの奥には、慎ましくも確かな存在感を放つ膨らみが隠されている。化粧も薄く、全体的に清楚な「理想の母親」といった佇まいだが、それが逆になんとも言えない色気を醸し出していた。

(.....ほう、これは予想外だな.....。)

子供たちの無邪気な挨拶なんて、もはや俺の耳には届かない。清楚な仮面の奥に潜む「女」を暴いてやりたいという、男としてのどす黒い好奇心が、下腹部の奥で静かに熱を持ち始めた。

死んでいた俺の休日に、極上の獲物が現れたのだ。

「ようこそハルト君、ハルト君ママ。さあ、遠慮せずに入ってください」

俺は唇の端を吊り上げ、彼女を家の中へと誘った。

俺は二人をリビングへと促した。案内しながら改めて部屋を見渡すと、床にはミニカーやレゴブロック、さらにはおもちゃの理科実験道具などが雑多に転がっている。

「ははは、息子のおもちゃが散らかったままで失礼。……タカシ、お前、友達が来る前に片付けなさいって言っただろ？」

「えー、これでも片付けたんだよー」

息子とそんな軽口を叩きながら、ハルト君ママをソファーへと誘導する。

「すみません、急にお邪魔してしまって。ハルトの母の沙織です。今日は奥さんがいらっしゃるのかと……」

「タカシの父の一朗です。妻は仕事で、朝出かけてしまいました。まあ、ゆっくりしてってください」

ソファーに腰を下ろした彼女が、丁寧にもう一度会釈をした。ハルトの母、沙織。近くで見ると、その肌はきめ細かく、守ってやりたくなるような儂げな雰囲気纏っている。

.....おとなしそうな女だ。こういうタイプが、一度乱れたらどうなるのか。想像するだけであそこが熱くなる。

タカシとハルトもぎこちなく挨拶を交わしていたが、子供の順応性は高い。すぐにタカシがソワソワとハルトの袖を引いた。

「お父さん！ ハルトと二階で遊んでくるね！」

「ああ、ハルト君に怪我させるなよ」

二人ははしゃぎながら、ドタドタと階段を駆け上がっていった。一気に静まり返ったリビング。残されたのは、俺と、人妻の二人きりだ。

「ハルトがすみません、お騒がせしてしまって……」

「ははは、タカシも同じですよ。気にしないで下さい。  
子供は元気が一番ですから」

俺が努めて優しく微笑むと、沙織は恐縮したように、けれどどこか安心したように小さく頭を下げた。

(……ちっ、もう少し小綺麗な格好をしておけばよかったな……。)

膝の抜けたジャージ姿の自分を少し後悔する。だが、この「家庭的で無害な父親」という今の外見は、彼女の警戒心を解くにはかえって好都合かもしれない。

俺はコーヒーを淹れるため、キッチンへと向かった。  
リビングと地続きのキッチンからは、ソファーに腰掛ける沙織の姿がよく見える。手元を動かしながら、俺は獲物を品定めするような視線を彼女に投げた。

(.....くく、いい身体してやがる。あの柔らかそうなケツのライン、最高だな。)

ブラウスの隙間から覗く、白く柔らかな谷間。そしてタイトスカートの生地を内側から力強く押し上げる、豊満なヒップライン。おとなしそうな顔立ちに似合わないその肉感的なボリュームに、思わず口角が吊り上がるのを抑えられない。

「いつもハルトと仲良くしていただいて、本当にありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ。タカシが迷惑をかけていないか心配なぐらいですよ。これからもよろしくお願いしますね」

俺はコーヒーカップを運び、彼女の正面に腰を下ろした。適当に世間話を合わせながらも、俺の頭の中は、そのスカートの下肉がどれほどの弾力を持っているのか、卑猥な妄想で埋め尽くされていた。

やっぱり人妻ってのは、特有の「重み」があってそそるな。あの腰からでかい尻にかけてのライン……最高だ。女の価値は、やっぱりケツで決まる。

「……実は最近、工作中的の姿勢が悪いのか、腰痛がひどくなってしまって」

会話が途切れた隙間に、沙織がふと困ったような笑みを浮かべて零した。緊張がほぐれてきたのか、デスクワークによる肩こりや腰痛に悩まされているという、プライベートな愚痴がこぼれ出す。

「腰痛、ですか。それは辛いですね……」

俺は同情を装いながら、心の中でほくそ笑んだ。沙織が自らさらけ出した「肉体の悩み」。それは、彼女の聖域へ踏み込むための、これ以上ない「免罪符」に見えた。

俺は獲物を追い詰める猟師のような冷徹な欲望を、温和な父親の仮面の下に隠し、静かに罠を仕掛けた。

「それは大変だ。うちの妻も腰痛持ちでね、その辛さはよく分かりますよ。いつも俺がマッサージしてやってるんですが、結構効くみたいでね」

「あら、羨ましい……。ふふ、一郎さんは優しい旦那様なんですね」

沙織は少しだけ羨望の混じったような、無防備な笑みを浮かべた。俺はその隙を逃さず、世間話の延長のような軽いトーンで切り出した。

「どうです？タカシたちもまだ当分は遊びそうだし、待っている間、少し揉んであげましょうか」

「えっ、そんな……悪いですよ！」

「いえいえ、遠慮なんていりません。実は学生時代に整体を少し齧ってましてね。手持ち無沙汰なだけですから。ちょっと準備しますね」

戸惑う彼女の返事も待たず、俺はリビングの端に立てかけてあったピラティスマットを床に広げた。強引な展開に沙織は目を丸くしているが、拒絶するまでの勇氣はないらしい。この手の女は、一度ペースを握ってしまえばこっちのものだ。

俺は棚からアロマオイルを取り出し、火を灯した。海外のオークションサイトで手に入れた、媚薬成分配合を謳う胡散臭い代物だ。効果のほどは博打だが、もし本物ならこれほど面白い展開はない。

「このアロマ、リラックス効果が高いんですよ。いい香りでしょう？」

準備を進めながら、俺は改めて彼女の身体を舐めるように視線でなぞった。

やっぱり、最高にいい身体だ。タイトスカートに包まれたその豊満なケツを眺めているだけで、俺の股間が熱くなる。……その奥の穴まで、俺の欲望で塗りつぶしてやりたい。

そんなどす黒い本能を「親切な隣人」の笑顔で隠し、俺はマットの脇で中腰になった。

「さあ、沙織さん。こちらに横になってください。……大丈夫、きっと身体が『楽』になりますよ」

## 第二章：甘い蹂躪の指先

快樂に震える深淵。教え込まれたのは、尻でイク悦び。

「どうぞ、ここに。少しは楽になりますよ」

俺がリビングに広げたピラティスマットを指すと、沙織は戸惑いを隠せない様子で立ち尽くした。

二階からは、息子たちがふざけ合う無邪気な足音が響いている。その明るい喧騒が、今この場所に漂い始めた密やかな空気の異質さを、より際立たせていた。

「あの、本当にすみません……。少しだけで、結構ですから……」

「ええ、大丈夫ですよ。いつも妻にやっていることですし、遠慮しないで」

おずおずと、彼女がマットにうつ伏せになる。

タイトなカットソー越しに浮き出た背中のライン、そして、ピラティスマットの反発に抗うようにして盛り上がった、豊かなお尻の曲線。

ピッタリと密着するスカートを押し広げる双丘の張りど、そこからむっちりと伸びる太ももが、暴力的なまでの肉感を主張している。

(.....いい身体だ)

俺は口元に優しい笑みを貼り付けたまま、内心では猛り狂う本能をなだめていた。

沙織の腰に、薄手のタオルケットをふわりと被せる。その上から、俺はゆっくりと手を置いた。狙ったのは、腰の最下部、背骨が緩やかに沈み込むあたりだ。

「っ！」

掌に、彼女の身体がビッと強張る感触が伝わってきた。

怯えた小動物のような反応。それが俺の支配欲を、チリチリと刺激する。

「はは、緊張しますよね。でも、力を抜いて。俺に全部預けてください」

「その、すみません……」

タオルケット越しでも分かる、彼女の肌の熱。二階の子供たちの笑い声が遠のき、俺の指先には、沙織の速すぎる鼓動がトク、トクと、微かに、しかし確かに響いていた。

俺は努めて穏やかな声で、彼女の不調に耳を傾けた。いつから、どこが、どんな時に痛むのか。

リビングにはアロマの甘い香りが満ち、沙織の強張っていた肩の線が、少しずつマットに沈み込んでいく。

俺が「真面目な施術者」を演じれば演じるほど、彼女の警戒心という名の防壁が、一枚ずつ剥がれていくのが分かった。

(.....チョロいもんだ。信じ切ってやがる。)

掌の下で、沙織の肌が熱を帯び始める。

息子つながりのママ友。上品で、どこか近寄りがたい

「人妻」。そんな女が今、俺の目の前で無防備に背中を晒している。そう思うだけで、下腹部の熱が猛烈にせり上がってきた。

「そうなんですね。ここですよね.....かなり、固くなっていますよ」

俺はドロドロとした内心を「親切心」というオブラートで包み隠し、指先にゆっくりと力を込めた。指が肉の奥へと沈み込むたび、彼女の柔らかな身体の質感が、ダイレクトに俺の脳を焼く。

「あの.....はい、そうです。いつも痛くて.....。本当に.....とてもお上手、ですね.....」

吐息の混じった声。彼女自身、それがどれほど艶っぽく響いているか自覚がないのだろう。それが余計に、俺のサディスティックな欲望を煽った。

「ははは、なかなかのものでしょ。いつも妻にも喜ばれてるんですよ」

俺は嘘をついた。妻になんて一度もやったことはない。五分、十分……。

時計の針が進むごとに、彼女の呼吸は深く、重くなっていく。十分な「信頼」を勝ち取った俺は、獲物を逃さないよう慎重に、しかし確実に、その指先を彼女の足元の方へと滑らせていった。

「ハルト君ママ、ちょっと姿勢変えますね」

俺は彼女の太もも付近に手をかけると、有無を言わさぬ動作で、その細い腰を跨ぐようにして膝をついた。

「えっ……！ あの……っ」

沙織の肩が跳ね、驚きで声が裏返る。

俺は馬乗りのような姿勢から彼女の腰に掌をぐっと押し当て、努めて冷静な「専門家」のトーンで被せた。

「次は、この姿勢じゃないと体重が乗らなくて。うまく押せないんですよ」

もっともらしい理屈を並べながら、俺の股間は彼女の柔らかなお尻をダイレクトに捉えていた。薄い生地越しに伝わる、人妻の肉体の温もり。

(.....ふふ、逃げられない。)

二階からは子供たちの無邪気な叫び声が聞こえる。その真下で、俺が彼女の柔らかな腰つきにどんな欲望を走らせているかなど、彼らは夢にも思っていないだろう。

「ほら、ここです。少し強くしますよ」

「あ……あ、はい……っ」

そのまま腰回りを攻め続け、彼女の意識をマッサージの「痛み」と「熱」に集中させる。

呼吸が整ったのを見計らい、俺は指先の位置を腰から少しずつ下方、肉付きの豊かなお尻の曲線へと滑らせた。

「あっ……！　そこは、大丈夫です……凝ってない、ですから……っ」

沙織の声に、明らかな焦りが混じる。

彼女が顔を歪めて振り返り、非難めいた視線を投げかけてきた。だが、俺は知っている。彼女はここで大声を出すことなんてできない。二階には最愛の息子がいるし、俺は、あくまで「親切な友人」としてここにいるのだ。

（そんな目で見たって無駄だ。あんたの性格は、大体わかってるんだからな……。）

恥じらいで頬を染め、強く拒絶しきれない彼女の甘さを、俺は冷徹なまでの愉悦とともに味わっていた。

「ハルト君ママ、腰の凝りはだいぶ解れましたよ。でもね、そこだけだと、すぐにまた固くなってしまいますから。こっちもほぐさないと」

俺は両手で目の前の双丘のやや上、柔らかな肉の膨らみを深く圧迫し、もっともらしい理屈を並べ立てた。

「ここは中臀筋といって、腰痛の要なんです。せっかくだからです、最高の結果を実感してもらいたいですよ。独学ですけど、それなりに勉強してるんですよ。……僕に任せておけば、間違いありませんから」

「……あの、はい……すみません……」

申し訳なさそうに身を縮める沙織。その殊勝な態度が、俺の中の加虐心をさらに煽る。

焚き染めたアロマの甘い香りが、彼女の理性と警戒心をじわじわと溶かしているようだ。その証拠に、俺の手が触れるたび、彼女の身体は微かな震えとともに、熱を帯びていく。

(.....いい反応だ。この匂いに、少しずつ『毒』を混ぜておいた甲斐があったな。)

左右交互に、お尻のふちへ深く指を沈める。

時折、手のひらを大きく広げ、中心にある「割れ目」を押し広げるように圧をかけた。

「っ.....あ、あの、ん.....っ」

沙織の喉から、抗いきれない吐息が漏れる。

ドクン、と心臓が跳ねた。それは単純な興奮というより、獲物を完全に網にかけた捕食者の悦びに近かった。

俺は慎重に、.....

——体験版はここまでとなります。

倒錯した快樂の底へと沈んでいく沙織の運命は、製品版  
でお楽しみいただけます。

蜜々文庫

# 奥付

作品名 沙織 / 直腸に刻まれた、夫への裏切りと排泄の悦楽 【体験版】  
著者 硝子蜂  
発行 蜜々文庫

## ビジュアル

生成AIによる生成画像を加工・編集

## 制作注記

本作のテキストは著者による創作であり、AIによる自動生成をベースにした独自の編集・加筆を行っています。

© 2026 硝子蜂 / 蜜々文庫

